

サファイアを君へ

sample

麻呂吉



目次

サファイアを君へ

—サファイアを君へ スピンオフ—
いつか夢の続きを

99
+ 1

remember

140字ショートストーリー

あとがき

206 193 183 161 91 7

ATTENTION

No part of this publication may be lent, resold, reproduced, scanned, stored in a retrieval system or transmitted in any form or by any means without the prior written permission of the author, nor be otherwise circulated in any form of editing, binding or cover other than that in which it is published and without a similar condition being imposed on the subsequent purchaser.

サ
フ
ア
イ
ア
を
君
へ

閣下、どうかお気を付けください、嫉妬というものに。

それは緑色の目をした怪物で人の心をなぶりものにした挙句、食い物にするのです。

ある戯曲の一節がクロコダイルの頭に浮かんだ。

クロコダイルの視線は一枚の写真に向けられている。そこに写っている二人の姿を見つめるとクロコダイルの胸に重い痛みが走った。向けられた事の無いドフラミンゴの幸せそうな笑顔、そして横には見知らぬ男の姿。

いや、見知らぬわけではなかった。ドフラミンゴの横に映る男の顔は、毎朝鏡の中からしかめっ面で睨み返してくる自分の顔に瓜二つなのだ。

ただし、その男の顔に傷は無い。左手はまぎれもなく本人の手だ。

いつか夢の続きを

柔らかな朝陽がクロコダイルの臉をそつと撫でた。

真つ白のシーツの中でクロコダイルが薄く目を開ける。大きな窓に視線を向けると窓の外では朝陽に輝く瑠璃色の海と紺碧の空が一日の始まりを告げていた。

クロコダイルはまだ眠い目を擦りながらベッドから下りた。欠伸をしてベッドを振り返るとブロンドの大男がぐつぐつと眠り続けている。安心しきって眠る寝顔は、ギラギラと得意のスマイルを浮かべる普段の姿よりも随分と幼く見える。窓から差し込む光に包まれてブロンドが優しく光る。こうして見ていると、フラミンゴと言うより大きな体をしたヒヨコの様だ。そう思うとクロコダイルは小さく笑いダイニングへと足を向けた。

白を基調としたダイニングにはシンプルな調理器具が並ぶ。クロコダイルは棚からドリッブ用の既に挽かれた珈琲豆を取り出した。湯を沸かす間、慣れた手つきで二つマグカップを用意して手元に並べる。サーバーを取り出しドリッブパーにペーパーフィルターをセットすると珈琲を専用のスプーンで入れる。準備が終わると近くの椅子に腰かけのんびりとコンロの火を眺んでいた。

99
+
1

久々に訪れた新世界の島は相変わらず砂漠のそれとは異なる熱気を纏っていた。

”愛と情熱の国”ドレスローザ。

俺には無縁の言葉を冠する街。

長いコートを揺らし、街を見下ろす高台に佇む城へ向かう。人々の喧騒を感じながら。

「突然のお声かけ失礼します。その凛々しいお姿、クロコダイル様と御見受けします。いかがですか、この愛と情熱の街を楽しんでいらつしやいますか？」

真っ赤なドレスを着た女が近づいて来た。足を止め視線のみ女に向ける

「どうかしら、このドレスローザを私が案内して差し上げますわ。勿論お望みなら、どんなところでも、ね。」女は陶器の様に抜ける白の肩を一撫ですると、ドレスと同じ真っ赤に彩られた唇を指でなぞりながら妖艶な視線を俺に向けた。

remember

執務室に心地良い風が吹き抜ける。

ペンを走らせていると、視界にうっとおしい影が映りこんだ。

「……とうとう盗撮に手を出したか、フラミンゴ野郎。この変態め、海軍に突き出すぞ。」

「七武海に何言ってるんだ、鰐野郎。お気になさらずお仕事をどうぞ、フッフ。」

ドフラミンゴはペンを走らせるクロコダイルに映像電伝虫を向けながら見つめている。

しばらくして書類を書き終えたクロコダイルは溜息をこぼしてペンを置いた。

「お前、よつぽど其奴を気に入ってたな。証拠やらの記録用に使うならばまだしも、私用で其奴を使う気が知れん。」

クロコダイルは葉巻を取り出し火を付けた。いたずらな風が漂う紫煙をかき混ぜる。

「フッフッフ、そりやもう。映像電伝虫がありやお前の姿をいつ何処でも拝む事ができる。最高じゃねエか。」

140
字
シ
ョ
ー
ト
ス
ト
ー
リ
ー

きつとそれで正解

砂を纏った風がカーテンを揺らし、見慣れた男が姿を現した

其奴は特に何を言う訳でも無く俺の隣に座る。

俺は其奴の手にそつと自分の手を重ねた。

二人で眺める窓の外には水平線で区切られた美しい二色の青が広がっている

壊したくて堪らないこの醜い世界を美しいと思う日が来るとは思わなかった